

会 報

No.52 (1995年10月)

目 次

◆第18回(1995年)日本分子生物学会年会のお知らせ(その3)	1
◆第18回総会のご案内	1
◆第19回(1996年)日本分子生物学会年会のお知らせ(その1)	2
◆科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦について	4
◆第9期評議員会将来計画委員会報告	4
◆博士研究員制度拡充の要望書	5
◆討論会「構造生物学フォーラム」報告	6
◆学術賞、研究助成への本学会推薦について	7
◆研究助成・学術各賞についてのお知らせ	8
○第1回ベックマン奨励賞	8
○山田科学振興財団1996年度研究援助	8
◆各種シンポジウムのお知らせ	9
○第10回『大学と科学』公開シンポジウム「遺伝子治療」, 「脳研究の最前線」	9
○千里ライフサイエンスシンポジウム	10
○千里ライフサイエンスセミナー	10
○Perspectives on Protein Engineering	11
○アジア・オセアニア生化学者分子生物学者連合(FAOBMB) 第12回国際シンポジウム	11
○第10回国際組織細胞化学会議	12
◆日本学術会議だより(No. 37, No. 38)	13
◆Genes to Cells 購読申込のご案内	

日 本 分 子 生 物 学 会

(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

◆第18回（1995年）日本分子生物学会年会のお知らせ（その3）

第18回年会では、700題を越える一般口頭発表と約1,300題のポスター発表が行われ、初めて一般発表の演題数が2,000題以上になります。一般口頭発表はこの2年間行われておらず、その是非についてプログラム委員会でも議論になりましたが、若い世代に口頭発表のチャンスを作り、より積極的に学会参加の経験を積んで頂きたいという考え方に立ち、会場の条件の許す限り行うことに致しました。当初は、どこまで応募者の希望に沿うことができるか心配でしたが、最終的にすべて第一希望通りの形式で発表して頂くことができるようになりました。

シンポジウムは企画を公募したところ、予想を上回る数の応募がありました。シンポジウムの主旨（急速に進展している分野、あるいは複数の分野に影響のある課題という主旨）と全体のバランスを考えて、応募者間での調整をお願いすると同時にプログラム委員会からお願いした企画も3題加えて、最終的に30題を行うことになりました。シンポジウムの内容については、世話人にすべておまかせいたしました。また、Strominger 博士と Stillman 博士による免疫と DNA 複製についての特別講演を企画いたしました。

バイオテクノロジーセミナーは昨年より1題増えて、9題が開催されます。

以上のように、今年度の年会は本学会員を始め関係各位の創意とご努力により、かつてない規模で多彩な内容の学会として開催されようとしています。

概要は次のとおりです。詳細は会報と同封のプログラムを御覧下さい。

1. 会 場：名古屋国際会議場（名古屋市熱田区熱田西町 1-1）
2. 会 期：1995年12月6日（水）～9日（土）
3. 参加受付：1995年12月6日（水）午前8時より
当日参加費：会員 6,000円、学生会員 5,000円、非会員 7,000円
4. 発表について：
シンポジウム：12月6日～7日の午前9時から12時と9日の午後1時から4時
ポスター発表：12月6日～8日の午後1時から3時
一般口頭発表：12月6日～8日の午後3時30分から6時、9日の午前9時から12時
5. 特別講演：12月8日午前9時30分から11時30分（センチュリーホール）
6. 総 会：12月8日午前11時45分から午後12時30分（センチュリーホール）
7. バイオテクノロジーセミナー：12月6日～8日の午後12時30分から3時
8. 連絡先：〒565 豊中市新千里東町 1-4-2
千里ライフサイエンスセンタービル14階
学会センター関西 内
第18回日本分子生物学会年会 事務局
Tel (06) 873-2301(代) Fax (06) 873-2300

◆第18回総会のご案内

第18回年会の会期中に、日本分子生物学会第18回総会を下記により開催いたしますので、ご出席をお願いいたします。

（会長 松原謙一）

記

日時：1995年12月8日（金）午前11時45分～午後12時30分

場所：名古屋国際会議場 1号館2階 センチュリーホール（大ホール）

◆第19回（1996年）日本分子生物学会年会のお知らせ（その1）

第19回日本分子生物学会年会を下記の要領で札幌において開催いたします。

1. 会 期：1996年8月26日（月）～30日（金）
総会8月29日（木）
2. 会 場：札幌ロイトンホテル、厚生年金会館、教育文化会館（3会場は相互に隣接）
3. 内 容：第19回年会は第69回日本生化学会大会との合同年会として行われます。この合同年会の開催に至る経緯については、本年3月の会報 No. 50で前会長の吉川寛先生からご説明をいただいておりますが、両学会員の研究交流を図る初めての試みでもあり、一般講演、シンポジウム、特別講演、公開講演会などすべての企画を一本化したしました。また、両学会の交流の在り方などについての討論会も企画しています。また、若手研究者の交流を図るために、カクテルアワー、ミキサーなどを企画していますので、多数の方々の御参加をお願いいたします。
4. 応募方法：本合同年会では、一般講演はすべてポスターとし、シンポジウムは約35テーマを企画しておりますが、公募はいたしません。また、合同年会での新しい企画としてイブニングセミナー「ニューフロンティア」を下記の要領で募集しますので、多数応募していただければ幸いです。なお、一般講演の抄録用紙と募集要領は会報 No. 53（2月上旬）でお届けし、申込締切は1996年4月15日（月）です。

1995年10月

第19回日本分子生物学会年会・第69回日本生化学会大会
合同年会組織委員長 大塚栄子

第19回日本分子生物学会年会のイブニングセミナー「ニューフロンティア」の企画の募集

1. 趣 旨：21世紀を間近にした今、各界では新たな研究-技術の創成が求められています。明治維新という大変革期にニューフロンティアを求めて渡道した人達によって開拓された北海道で、生命科学領域の2大学が初めて合同年会を開くことは極めて意義深いものと思われまます。現在、多くの研究者を魅了し、熾烈な研究競争が繰り広げられている「細胞内シグナル伝達」、「細胞分化」、「遺伝子発現」などの研究領域も、ニューフロンティアを求めた先駆者の萌芽的研究が開花したものといえます。それらの研究領域も含めて、独創的な発想、意外性のある着想に基づく新たな研究が育ちつつあると思われまますので、本セミナーはこうした萌芽的研究に発表の場を提供するために企画されました。個人あるいは数人からなる研究グループからの応募（自薦または他薦）、また学際領域からの応募（他薦）も歓迎します。発表形式は自由です（例えば、個人発表、パネルディスカッション形式、ミニシンポジウムなど）。時間は第1、2、4日目の午後7時から90分（企画により変動）を予定しています。会場の都合もあり、合同年会プログラム委員会で検討のうえ、採択するか否かを決定しますので、採択されないこともありうることをあらかじめご了承ください。
2. 応募要領と期限：「企画テーマとその概要（400字程度）、ならびに講演予定者の氏名、所属、職」を1996年1月末日までに合同年会企画委員会まで送付（郵送あるいはFax）して下さい。
3. 送付先：〒060 札幌市北区北12条西6丁目 北海道大学薬学部 合同年会企画委員会

[Fax (011) 706-4989/4990]

なお、この件についての問い合わせは企画委員長 長澤滋治 [Tel (011) 706-3245 ; Fax (011) 706-4990] まで。

第19回日本分子生物学会・第69回日本生化学会 合同年会委員名簿

委 員 長	大塚 栄子	北海道大学薬学部
組 織 委 員	秋野 豊明	札幌医科大学医学部
	有賀 寛芳*	北海道大学薬学部
	飯塚 敏彦	北海道大学農学部
	石橋 輝雄	北海道大学医学部
	上田 一郎*	北海道大学農学部
	上野 直人*	北海道大学薬学部
	柿沼 光明	北海道大学免疫科学研究所
	賀佐 伸省	札幌医科大学医学部
	加納 英雄*	札幌医科大学医学部
	鎌滝 哲也	北海道大学薬学部
	菊池九二三	北海道大学免疫科学研究所
	葛巻 暹	北海道大学医学部附属癌研究施設
	久保木芳徳	北海道大学歯学部
	斉藤 政樹*	北海道大学医学部附属癌研究施設
	斉藤 昌之	北海道大学獣医学部
	杉本 和則	北海道大学理学部
	谷口 和弥*	北海道大学理学部
	内藤 哲*	北海道大学農学部
	長澤 滋治**	北海道大学薬学部
	西 信三	北海道大学医学部
	野村 靖幸	北海道大学薬学部
	藤永 蕙	札幌医科大学癌研究所
	横沢 英良***	北海道大学薬学部

(*印は企画委員兼務、**印は企画委員長、***印はプログラム委員長)

企 画 委 員	上出 利光	北海道大学免疫科学研究所
	笠原 正典	北海道大学医学部
	小池 達郎	北海道大学理学部
	酒井 正春	北海道大学医学部
	澤田 幸治	札幌医科大学癌研究所
	瀧谷 重治	北海道大学遺伝子実験施設
	松岡 一郎	北海道大学薬学部

◆科学研究費補助金の審査委員候補者の推薦について

日本学術会議より平成8年度科学研究費補助金の基礎生物学分科・分子生物学細目の審査委員の候補者の推薦を依頼されました。本年度新たに選出が必要な第1段審査委員候補の4名について、評議員の全会員を対象とした選挙に基づき4名の会員を推薦いたしました。また、第2段審査委員候補1名については、日本生物物理学会と協議のうえ今年度は日本生物物理学会より推薦することといたしました。

◆日本分子生物学会 第9期評議員会 将来計画委員会報告

1995年7月4日(火)に東京大学山上会館において第1回の将来計画委員会を開き、以下の立案を行った。

1. 活動姿勢：前期の活動と残された問題点(日本分子生物学会会報51号)を確認の後、討議に入った。残された問題のすべてに正面切って解決を与えることは相当な難事であるため、今期は手の付けられない問題からひとつずつ取り組むという姿勢で臨みたい。
2. 分子生物学の研究環境について：大学あるいは各省庁の研究機関における組織改革や組織整備、研究費の配分システム、博士研究員制度などは分子生物学の発展のための極めて大きな要素であり、学会としても看過できない問題である。これらの問題につき、日本学術会議の研究連絡委員会と学会との協同で討論会を開くなど、各方面に働きかけ、また、科学行政の意思決定に直接関わることの多い学術審議会に対して学会として必要な要望を出していくこととした。
3. 博士研究員制度の充実の要望書：懸案である、我が国における博士研究員制度の充実を要望する声明につき討議した。前期委員会の方針を受けて山本(正)委員長が準備した草案が検討され、文言・形式に多少の修正を加えることで全体を了承した。この要望書は評議員の議を経たうえで、関係各方面に配布する。
4. 講習会の支援：新たな研究分野を切り開くための講習会を学会として支援する件が討議され、桂委員を中心に、線虫分野の講習会の企画を検討していくことになった。
5. 構造生物学の振興支援：学際的な分野の振興のために学会を横断する研究討論会を開催する件に関し、日本学術会議の分子生物学研連、生物物理学研連および分子レベルの構造生物学振興小委員会の3者が主催し、日本分子生物学会が共催して6月30日に開催された「構造生物学フォーラム」について、内田分子生物学研連委員長より背景と会の内容について説明を受けた。現状では、構造生物学の演題が日本分子生物学会年会の全演題中に占める割合は僅かであるが、国際的にみても学会が支援すべき重要な分野であり、今後もフォーラムの共催者として支援を続けていくこととした。
6. 平成9年度科学研究費補助金に係る「時限付き分化細目の設定」について：標記の件については、時間的制約と諸般の情勢を勘案し、「構造生物学」を分子生物学研連と生物物理学研連の共同提案として日本学術会議に上申することとした。
7. 生物教育用語集について：日本動物学会と日本植物学会が中心になって企画し、各生物科学関係学会に意見が求められている、高校までの「生物教育用語集」の標準化について討議し、教育用語集が生物の丸暗記教育を助長する危惧が指摘された。吉川委員に、学会としてのこの問題への今後の対応において中心的役割を果たすよう依頼した。
8. 前記3項目にあげられた作業をもとに、次の「博士研究員制度拡充の要望書」をまとめ、関係機関に提出した。

(委員長 山本正幸)

◆博士研究員制度拡充の要望書

平成7年9月18日

関係機関 各位

日本分子生物学会
会長 松原謙一

我が国における生命科学的研究が持つ困難な問題として、博士研究員（ポスドク）制度が貧弱で、博士研究員が科学研究を支える層として定着していないことがくり返し指摘されてきました。日本分子生物学会では、この問題を過去数期にわたって評議員会および将来計画委員会で討議し、我が国が生命科学において先進国の一員としての責務を果たすために、博士研究員制度を抜本的に拡充することが急務であるとの認識に達しています。折しも、本年7月20日付けで学術審議会より「21世紀に向けての研究者の養成・確保について—中間まとめ—」が公表され、その中で博士研究員制度の充実の必要性が謳われました（学術月報 Vol. 48 No. 9）。また、新聞記事によると、文部省、科学技術庁、通商産業省の3省庁で、若手研究者に対する支援枠を5年で3倍増にする予定であると報じられました（8月19日付け朝日新聞、同21日付け日本経済新聞）。これらの動向は本学会として大いに歓迎するところであり、各位のご努力に敬意を表するものです。ここに、我が国の博士研究員制度がなお一層充実したものとなるよう、本学会で取りまとめた要望を公にし、関係各位に対しその実現に力添えをお願い致したく思います。

日本分子生物学会は、生命科学分野における博士研究員制度の充実・改善のために、以下を要望します。

1. 生命科学分野においては、今後拡充が見込まれている日本学術振興会などの若手研究者の支援枠を、主として博士研究員（PD）の増加に充当して頂きたい。
2. 研究プロジェクトを主催する側から博士研究員の採用を申請できる制度を拡大整備し、研究機関・部局や各種の科学研究費補助金で博士研究員が安定して採用できるように諸条件を調整して頂きたい。
3. 生命科学分野における博士研究員制度は、研究者の流動性と合わせて初めて実りあるものになると考えられます。このため、原則として出身大学院とは異なる研究機関で研究に従事することを促すなど、博士研究員の流動性確保のために必要な規定をおき、真に活力ある博士研究員制度が生み出されるよう配慮を頂きたい。

付記

若手研究者養成のもう一つの柱である大学院博士課程の学生に対する支援について、本学会としてはその実情に鑑みて、生命科学分野においては一部の学生を手厚く優遇する方策よりも、必要とする者に広くベースラインの奨学金が支給され、かつ返済義務が免除される職の枠を拡大することを基本施策として頂きたい、要望します。

◆ 討論会「構造生物学フォーラム」報告

去る1995年6月30日に討論会「構造生物学フォーラム」を東京・虎ノ門パストラルで、日本学術会議分子生物学研究連絡委員会・生物物理研究連絡委員会・分子レベルの構造生物学振興小委員会（構造生物学推進への提言）の三団体の主催、日本分子生物学会の共催で開催いたしました。分子の内部構造や相互作用に基づいて、生命現象を司る生体高分子やその複合体の機能を解明しようとする、構造生物学。その振興が、我が国の分子生物学の将来の健全な発展に必須である、との認識のもとに企画された会です。タンパク質構造学を行っている人々の自己紹介と、生物学からはどのような構造学が要求されているのかを説明していただく overview を組み合わせ、議論が行なわれました。当日は50名の研究者、学生、企業関係者の出席を頂きました。

「DNA複製のOverview」を、釣本敏樹氏（奈良先端科学技術大学院大学）が複製装置の3次元モデルをもとに説明いたしました。参加者は、最近の進歩と構造への関わり方に大きく驚かれました。また、日本分子生物学会員が多数を占める会議とは異なった反応があったことが印象的でした。

中川敦史氏（北海道大学・理学部）は、結晶構造学の困難をリストアップされました。多くのご経験の後で、最も重要なのは、技術的困難もさることながら、どのようなタンパク質をターゲットに選ぶかということである、と主張されたのは、このフォーラムの目標とするところでもありました。佐藤孝雄氏（徳島大学・工学部）は、技術的困難の中心となる結晶作製の系統的方法を紹介されました。

「神経生物学のOverview」を堀田凱樹氏（東京大学・理学部）がされ、ショウジョウバエにおける神経回路形成を紹介されました。多くの遺伝学的に定義されていたものが、実体として捉まえられ始め、それらの間の相互作用を構造学として回答していく将来を示されました。

野中孝昌氏（長岡技術科学大学・生物系）はRNaseの構造解析を具体例として、日本でのタンパク質構造学の困難とその克服について話され、優れた成果に結びつけられた苦勞を話されました。渡邊信久氏（高エネルギー研究所）はフォトンファクトリーで各国の構造学者のお世話をされる立場から、日本のグループの困窮度をいろいろな統計を出して説明されました。国内グループは修士の学生に依存した体制が多く、熟練度が足りないのではないかという趣旨でした。

最後に、本年秋に、同趣旨の会議を大阪でも開くことを分子レベルの構造生物学振興小委員会会長内田久雄氏（帝京大学・理工学部）が紹介され、閉会いたしました。

（国立遺伝学研究所 嶋本伸雄）

◆学術賞、研究助成への本学会推薦について

選考委員会による慎重な審査にもとづいて、学術賞、各研究助成について下記のように本学会から推薦いたしました。

- 第27回（平成7年度）内藤記念海外学者招へい助成金

町田千代子（名古屋大学理学部）：招へい学者 Nancy Hopkins（マサチューセッツ工科大学）。本申請には助成が決定された。

- 第3回（平成7年度）日産科学賞

坂野 仁（東京大学大学院理学系研究科 教授）：リンパ細胞分化に伴う遺伝子再構成

- 第22回（平成7年度）日産学術研究助成：一般

藤木幸夫（九州大学理学部 教授）：細胞内小器官の構築とその制御・障害の分子機構

濱田博司（大阪大学細胞生体工学センター 教授）：脊椎動物の左右軸を決定する遺伝子プログラムの解析

なお同時に奨励研究18件を本学会より推薦した。

- 第12回（平成7年度）井上学術賞

山本雅之（筑波大学先端学際領域研究センター 教授）：転写因子群による赤血球特異的遺伝子発現制御機構の解析

- 第36回（平成7年度）東レ科学技術研究助成

宮園浩平（癌研究会癌研究所 部長）：セリノースレオニン・キナーゼ型レセプターの細胞内シグナル伝達機構

小川智子（国立遺伝学研究所 教授）：真核生物の遺伝的組換え機構の解析

- 第36回（平成7年度）東レ科学技術賞

岡田吉美（帝京大学理工学部 教授）：タバコモザイクウイルスの分子生物学的研究

◆研究助成・学術各賞についてのお知らせ

下記以外については会報 No. 51 をご覧下さい。

○第1回ベックマン奨励賞 募集要項

- 趣 旨：「ベックマン奨励賞」は生命科学全般の更なる発展を願って、国際的な評価に値する独自の・萌芽的な研究を行っている優れた若手研究者に対してその研究活動を奨励、振興ならびに支援することを目的とします。
- 対象とする分野：生命科学の全分野
- 応募資格：1996年1月1日の時点で40歳未満の学位取得者ならびに学位取得者と同等の能力を有すると認められた研究者
- 助成内容：総額150万円（2件以内）
- 募集期間：1995年9月1日（金）～12月22日（金）
- 応募方法：下記の書類をA4判の用紙にワードプロセッサまたはタイプライターで印書してご提出下さい。
 - 主要論文の要約
応募者本人が書いた1,000字以内のもの。主要論文への本人の寄与が明白であること。
 - 論文のリスト
過去に発表された論文の一覧および主要論文を含む別刷3編以内（写しでも可）。
- 研究経歴
 - 所属する研究機関・身分
 - 専門分野
 - 現在の研究課題（主要なもの3課題以内）
 - 学位取得者の場合
出身校（研究室・講座名・指導教官名）および学位課題
 - 推薦状（他薦の場合）
- 選考及び結果の通知・発表：生命分野の各専門領域に詳しい研究者の先生方に審査委員をお願いし、選考委員会を開いて審査します。
選考結果は1996年3月末日までに通知いたします。
受賞者には助成金を6月上旬に個人名義宛に交付し、6月中旬に受賞記念講演会を開催いたします。
- その他：提出された書類は返却いたしません。
問 合 先：〒151 東京都渋谷区笹塚 2-1-6
ベックマン(株)バイオラボ
ベックマン奨励賞事務局
Tel(03)5352-2843, Fax(03)5352-2844

○山田科学振興財団1996年度研究援助 候補推薦要項

- 援助の趣旨及び内容
 - 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助を致します。実用指向研究は援助の対象としません。
 - 援助額は1件当たり200～500万円、総額4,000万円、援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考致します。
 - 援助金を給与に充てることは出来ませんが、特に財団が指定した場合を除き、他の用途は自由です。
 - 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年間とします。
- 推薦方法
 - 推薦者：本財団が依頼した学（協）会の代表者
 - 推薦件数：1推薦者ごとに2件以内
 - 推薦手続：推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。
 - 所定の推薦書用紙又はその写しに必要事項を記入したもの 4部
 - 添付書類（研学（96）-5/7ページ参照）
- 記載上の注意
 - 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
 - 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。
- 推薦締切期日
本財団に推薦書が到着する締切期日は1996年3月31日です。
- 選考方法
選考委員会において選考の上、理事会が決定します。
- 選考結果の通知
1996年7月末迄に推薦者及び代表研究者等宛て文書にて通知します。
- 援助金の贈呈
選考結果の通知後適時銀行振込にて贈呈致します。
- 推薦書送付先及び連絡先
財団法人 山田科学振興財団（Yamada Science Foundation）
〒544 大阪市生野区巽西 1-8-1
Tel (06) 757-3311(代表)
- 研究の成果及び会計の報告
援助金の受領者には、後日当財団の連絡に基づき、研究経過、研究成果、会計について報告書の提出及び研究交歓会での発表をして頂きます。
- 付 記
 - 援助金の用途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。
 - 研究成果を文書によって発表される際には、本財団（財団法人 山田科学振興財団、Yamada Science Foundation）の援助による旨を記載し、報文の類にあってはその別刷1部、また著書の類にあってはその1部をご寄贈願います。
 - ご提出頂きました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

研究者各位へ

推薦者の項に対応する学(協)会は次記のとおりです。学(協)会により締切期日および募集方法等が異なりますから、代表研究者は応募の際、各学(協)会にお問合せ願います。

日本天文学会	日本化学会	日本生理学会	日本生物物理学会
日本物理学会	高分子学会	日本遺伝学会	日本発生物理学会
応用物理学会	日本農芸化学会	日本分子生物学会	日本植物生理学会
日本金属学会	日本薬学会	日本動物学会	日本植物学会
地震学会	日本生化学会	日本細胞生物学会	日本免疫学会
地球電磁気・地球惑星圏学会			

◆各種シンポジウムのお知らせ

○第10回「大学と科学」公開シンポジウム

「大学と科学」公開シンポジウムは、文部省の科学研究費によって進められてきた研究成果を広く公開・発表することにより、その研究活動を関係者ばかりでなく一般の方々にも理解していただくことを目的として、昭和61年度から開催されてきました。本年度は7つのセッションが開催される予定で、そのうちの2つが以下のセッションです。奮ってご参加下さい。

「遺伝子治療—新しい治療への期待」

会 期：1995年12月11日(月)・12日(火)

会 場：千里ライフサイエンスセンター

(大阪府豊中市新千里東町 1-4-2)

[第一日]

10:00 挨拶

第10回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
文部省

10:10 遺伝子治療とは：その現状

浅野茂隆 (東大・医科研)

10:50 どのようにして細胞に遺伝子を導入するのか

1. ウイルスベクターを用いる方法

島田 隆 (日医大)

2. その他の方法 中西真人 (阪大・微研)

3. 新しい導入法の開発

加藤郁之進 (宝酒造)

14:00 どのようにすれば特定の細胞を狙えるのか

新津洋司郎 (札幌医大)

14:40 安全性はどのようにすれば確保できるか

平間 稔 (ミドリ十字)

15:45 特別講演「遺伝子治療の将来展望」

高久史磨 (国立国際医療セ)

[第二日]

10:00 がん遺伝子治療のストラテジー

1. がん免疫からのアプローチ

濱田洋文 (癌研)

2. 薬剤感受性からのアプローチ

谷憲三朗 (東大・医科研)

3. がん遺伝子などからのアプローチ

吉田輝彦 (国立がんセ)

13:00 エイズの遺伝子治療

松下修三 (熊本大)

先天性疾患の遺伝子治療

恵美宣彦 (名大)

慢性疾患の遺伝子治療

金田安史 (阪大・細生工セ)

15:15 パネルディスカッション

「期待される新たな展開」

司会 浅野茂隆 (東大・医科研)

パネリスト

小澤敬也 (自治医大)

小林一三 (東大・医科研)

中畑龍俊 (東大・医科研)

16:45 挨拶

岡田善雄 (千里ライフサイエンス振興財団)

参加申込先：参加ご希望の方は、はがきに①参加希望日時、②郵便番号・住所・電話番号(自宅か勤務先かを明記)、③氏名・年齢、④職業(勤務先名)をご記入の上、下記の事務局宛に送付願います。後日、資料引換証を郵送します。なお、座席の都合がありますのでお早めにお申込下さい。

「脳研究の最前線—遺伝子から知能へ—」

会 期：1996年2月1日(木)～2日(金)

会 場：有楽町朝日ホール

(東京都千代田区有楽町 2-5-1)

[第一日]

10:00 挨拶

第10回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
文部省

10:10 基調講演

知能とは 甘利俊一 (東大・工)

11:00 情報伝達の分子メカニズム

1. 神経情報の伝達

高橋智幸 (東大・医・脳研・脳生理)

2. 情報伝達の調節

清水孝雄 (東大・医)

14:00 記憶・学習を担う分子

1. 運動の記憶と小脳

狩野方伸 (自治医大)

2. 記憶を支える情報受容分子

三品昌美 (東大・医)

15:50 神経回路の形成と発達

1. 神経回路網の形成

堀田凱樹 (東大・院・理学研)

2. 神経回路網の発達と学習

津本忠治 (阪大・医・バイオ
メディカル教育研究セ)

[第二日]

10:00 神経回路と知能

1. 形の認識

田中啓二 (理研)

2. 意志による運動 丹治 順 (東北大・医)

3. 認知記憶 宮下保司 (東大・医)

13:30 知能のメカニズム

1. 運動と認知の計算論

川人光男 (ATR 人間情報通信研・第3研)

2. 脳の計算過程を見る

外山敬介 (京都府医大)

15:10 パネル討論

脳機能の理解を目指して

司会

外山敬介 (京都府医大)

パネリスト

甘利俊一 (東大・工)

三品昌美 (東大・医)

堀田凱樹 (東大・院・理学研)

津本忠治 (阪大・医・バイオ)

メディカル教育研究セ)

宮下保司 (東大・医)

参加費 無 料

参加申込

はがきに①参加希望セッション名、②参加日時、③住所、電話番号、④氏名、⑤職業(勤務先)を明記の上、下記連絡先あてにお早めにお申込み下さい。

連絡先

〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2

文部省学術国際局学術情報課気付

第10回「大学と科学」公開シンポジウム

組織委員会

Tel (03)3581-4211 内線2591

○千里ライフサイエンスシンポジウム

「肥満症研究の最前線 —脂肪組織の分子生物学—」

会期: 1996年1月19日(金) 10:00~17:00

場所: 千里ライフサイエンスセンタービル5階

ライフホール

(地下鉄御堂筋線千里中央駅北口すぐ)

(大阪府豊中市新千里東町1-4-2)

主催: 財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協賛: 株式会社千里ライフサイエンスセンター

コーディネーター: 松沢佑次 (阪大・医 教授)

プログラム:

1. 脂肪細胞の分化・増殖の制御

河田照雄 (京大・農 助教授)

2. 培養脂肪細胞の増殖と分化: 球形の脂肪細胞も増殖する

杉原 甫 (佐賀医大・医 教授)

3. アポEリポ蛋白レセプターと脂質代謝

山本徳男 (東北大・遺伝子実験 教授)

4. 肥満遺伝子 (ob 遺伝子)

中尾一和 (京大・医 教授)

細田公則 (京大・医 助手)

5. Adipocytokine 分泌臓器としての内臓脂肪組織

船橋 徹 (阪大・医 助手)

参加費 (講演要旨含まむ):

会員 (ただし、大学、官公庁、主催・協賛団体会員)

: 6,000円

非会員

: 8,000円

学生

: 3,000円

定員: 200名

参加申込方法: ①氏名、②勤務先、所属、役職名、所在地、〒、電話、Fax 番号を明記の上、郵便または Fax で下記宛お申込み下さい。参加費は申込み後に大和銀行千里中央支店普通預金 No. 4601085 財団法人千里ライフサイエンス振興財団口座宛お振込み下さい。なお、振込みの際、振込者名の前に S5 とご記入下さい。ご送金確認次第、領収書兼参加証を送付致します。

申込先: 〒565 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8階

(財)千里ライフサイエンス振興財団 シンポ係

Tel (06)873-2001, Fax (06)873-2002

担当: 林

○千里ライフサイエンスセミナー

「細胞周期とアポトーシス」

会期: 1996年2月16日(金) 午前10時~午後5時

場所: 千里ライフサイエンスセンタービル5階

ライフホール

(地下鉄御堂筋線千里中央駅北口すぐ)

(大阪府豊中市新千里東町1-4-2)

主催: 財団法人千里ライフサイエンス振興財団

協賛: 株式会社千里ライフサイエンスセンター

コーディネーター: 長田重一 (阪大・医 教授/大阪

バイオサイエンス研 部長)

秋山 徹 (阪大・微研 教授)

プログラム

1. 癌抑制遺伝子と細胞周期

秋山 徹 (阪大・微研 教授)

2. TGF-β シグナル伝達系を制御する Novel Players

松本邦弘 (名大・理 教授)

3. チロシンキナーゼからのシグナル伝達と細胞周期調節

山本 雅 (東大・医科研 教授)

4. アポトーシスを起こす細胞周期変異株

西本教治 (九大・院・医学研 教授)

5. Bcl-2 ファミリーと ICE ファミリーによるアポトーシスの制御

辻本賀英 (阪大・医 教授)

6. Fas を介したアポトーシス

長田重一 (阪大・医 教授/大阪バイオ

サイエンス研 部長)

参加費 (講演要旨含まむ)

会員 (ただし、大学、官公庁、主催・協賛団体会員)

: 6,000円

非会員

: 8,000円

学生

: 3,000円

定員: 200名

参加申込方法: ①氏名、②勤務先、所属、役職名、所在地、〒、電話、Fax 番号を明記の上、郵便または Fax で下記宛お申込み下さい。参加費は申込後に住友銀行千里中央支店普通預金 No. 128278・財団法人千里ライフサイエンス振興財団口座宛お振込み下さい。なお、振込みの際、振込者名の前に J3 とご記入下さい。ご送金確認次第、領収書兼参加証を送付致します。

申込先: 〒565 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8階

(財)千里ライフサイエンス振興財団 セミナー係

Tel (06)873-2001, Fax (06)873-2002

担当: 近藤・内田

○INTERNATIONAL SYMPOSIUM
PERSPECTIVES ON PROTEIN ENGINEERING
“FROM FOLDS TO FUNCTION”

2-5 March, 1996 Le Corum Montpellier FRANCE
World Wide Web Address [http:// www. cryst. bbk. ac. uk/CEC/ pope5. html](http://www.cryst.bbk.ac.uk/CEC/pope5.html)
Organising chairman Dr. M J Geisow, Nottingham UK

The topics of the 5th International conference are: gene function discovery (celebrating the completion of the yeast genome sequence); protein remodelling/ de novo design; protein folding; biocatalysis especially redox enzymes and protein-nucleic acid interactions.

The conference will also feature presentations and satellite meetings of networks funded under the European Union 'Framework Programme'. These will reflect the main scientific themes of the conference. Other (French protein engineering) satellite meetings are also planned

SPEAKERS and CHAIRMEN

Tom Blundell (Cambridge, UK); Brian Clark (Aarhus, Denmark); Chris Dobson (Oxford, UK); Dino Moras (Strasbourg, France); Kosuke Morikawa (PERI, Osaka, Japan); and many others.

CONFERENCE ARRANGEMENTS

The Montpellier Conference Centre is a purpose-built facility owned by the City of Montpellier. The International airport is nearby and the hotels are within walking distance of the Centre. Provision has been made for up to 750 delegates, accommodated in a unified lecture theatre and open-plan exhibition hall. Refreshments, lunch, posters and exhibition stands are all in this area.

WORLD WIDE WEB SITE AND ON-LINE REGISTRATION

Uniquely for a conference of this sort, all the poster abstracts and exhibit descriptions will be posted for an indefinite period on the World Wide Web at a site specifically created for this purpose. Registration formalities can all be completed on-line. Scientific abstracts, including poster abstracts may be sent by E-mail via the World Wide Web site (address below). The main conference lecture programme will pause on Sunday afternoon to allow delegates to spend the remainder of the day visiting the exhibition and posters. It is also hoped to feature a short on-line biological resources and Internet workshop that would repeat at scheduled times.

CONFERENCE FEES

Early registration (before 1st November 1996), £200 (students, £100). From 1st November 1996, £225 (students, £120). On site registration, £250.

CONFERENCE SECRETARIAT

Further conference information, prices and booking forms available on request from: BIODIGM Ltd. Unit 5, The Hillside Centre, Upper Green Street, High Wycombe, HP11 2RB United Kingdom. (Tel: +44 1494 465375 Fax: +44 1494 446672).

E-mail biodigm@dial.pipex.com

Internet Home Page: [http:// www. cryst. bbk. ac. uk/ CEC/ pope5. html](http://www.cryst.bbk.ac.uk/CEC/pope5.html)

○アジア・オセアニア生化学者分子生物学者連合 (FAOBMB) 第12回国際シンポジウム

英文名: Federation of Asian and Oceanian Biochemists and Molecular Biologists (FAOBMB), The 12th International Symposium

会期: 1996年7月29日~31日/徳島市

会場: 徳島文理大学国際会議場, 多目的ホール

組織委員長: 勝沼信彦 (徳島文理大学 教授)

プログラム:

<主題> Gene regulation of biological function

① Aging and Nutrition

② Signal transduction and molecular recognition

③ Biological functions of Proteases

上記の3セッションにつきシンポジウムとポスターの発表を予定しています。

公用語: 英語

問合先: 〒770 徳島市蔵本町3-18-15

徳島大学酵素科学研究センター

酵素化学部門 木戸 博

Tel (0886)33-7424, Fax (0886)33-7425

○第10回国際組織細胞化学会議

英文名：10th International Congress on Histochemistry and Cytochemistry

会期：1996年8月18日(日)～8月23日(金)(6日間)

会場：国立京都国際会館(京都市左京区宝池)

トピックス：

1. 方法関連：免疫組織化学、デジタル画像処理、電子顕微鏡(細胞内小器官など)共焦点レーザ顕微鏡などの新しい顕微鏡、酵素組織化学
オートラジオグラフ、*in situ* ハイブリダイゼーション
サイトメトリーと形態計測、遺伝子工学(遺伝子のトランスフェクション、ノックアウト、トランスジェニック)、糖と脂質の組織化学
2. 細胞生物：核と脂質染色体、遺伝子、細胞表面と接着因子、細胞回転と生長
細胞骨格と細胞内輸送、レセプターとシグナルトランスダクション
発生と分化、アポトーシスと細胞死、フリーラジカルと脂質過酸化
神経科学への組織化学的アプローチ、植物細胞の組織化学
3. 疾患と組織化学：免疫—自己免疫疾患、癌—遺伝

子とその表現型の組織化学

組織化学の臨床への応用、内分泌疾患への組織化学的アプローチ

感染症への組織化学的アプローチ、老化の機序と疾患

4. 酵素標識抗体法の30年

連絡先：

第10回国際組織細胞化学会議 実行委員長 井端泰彦

〒612 京都市伏見区村上町383 A.C. プランニング

電話 (075) 611-2008 FAX (075) 603-3816

オーガナイザー：

名誉会長 小川和朗(京大 名誉教授)

名誉副会長 安田健次郎(慶應大 名誉教授)

会長 藤田哲也(京都府医大 名誉教授)

副会長 水谷 昭(愛知県心身障害者コロニー 名誉総長)

実行委員会：

委員長 井端泰彦(京都府医大・2解 教授)

財務委員長 渡辺慶一(東海大・医・2病理 教授)

地区委員長 芦原 司(京都府医大・1病理 教授)

出版委員長 斉藤多久馬(自治医大・1解 教授)

プログラム委員長

中根一穂(長崎大・医・3解 教授)

戦略研究と高度研究体制の構築を

平成7年5月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、4月に開催された第121回日本学術会議総会の概要と総会第二日に行われた会長基調報告の内容に自由討議の議論を踏まえて修正した「我が国の学術体制を巡って」の一部を紹介します。

日本学術会議第121回総会報告

日本学術会議第121回総会は、平成7年4月19日から3日間にわたって開催されました。

総会初日の午前中は、①「阪神・淡路大震災調査特別委員会の設置」、②「国際農業工学会（Commission Internationale de Genie Rural : CIGR）への加入」の2件が提案され、いずれも賛成多数で可決されました。

阪神・淡路大震災調査特別委員会は、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災が、日本学術会議として緊急に対応すべき課題であるとの結論に達したので、3月27日の第843回運営審議会において新たな臨時（特別）委員会として設置され、総会で承認することとしたものです。審議事項は、阪神・淡路大震災が提起した問題点について、地震学、災害工学等自然科学分野のみならず、人文・社会科学分野を含め総合的に検討することとしています。

また、国際農業工学会への加入は、従来、日本学術会議が日本の科学者の代表機関として、国際学術連合ICSUを始めとする46の国際学術団体に分担金を支払って加入していますが、今回の新規加入の承認によ

り、その数が47となり、国際農業工学会に対応する国内委員会は、農業土木学研究連絡委員会となります。

総会2日目は、伊藤正男日本学術会議会長から、「日本学術会議の課題～高度研究体制を目指して～」と題した基調報告が行われ、会長が提起したさまざまな課題について、会員間の自由討議が繰り広げられました。

この報告は、昨年の第120回総会において第16期活動計画を定めてから既に半年を経過しており、この間の多彩な活動を通じて伊藤会長が考えてきた問題、特に、我が国の学術体制の問題を中心に適宜取捨選択したいいくつかの課題について、伊藤会長自身の見解を述べ、人文・社会科学分野から自然科学分野わたる幅広い会員各位の意見を聞き、会員に共通の基本認識を深めることを目的として行われたものです。

なお、伊藤会長が、基調報告の内容に、自由討議の議論を踏まえて修正した「我が国の学術体制を巡って」は、序文の他7項目から構成されていますが、そのうち2項目について紹介します。

我が国の学術体制を巡って（抄）

—戦略研究と高度研究体制—

日本学術会議会長 伊藤 正男

〈「戦略研究」とその意義〉

大学では知的興味に基づく基礎研究を、企業では実用上の重要性を持つ応用研究を、という古典的な役割分担はもはや成り立たなくなっている。最近英米両国で基礎研究と応用研究の間に設けられた「戦略研究」のカテゴリーは、工学、農学、医歯薬学系の研究室では意識しないまま基礎研究として行われてきたものを多く含み、また企業において「目的基礎研究」と呼ばれるカテゴリーとほぼ対応している。研究者の知的興味と実用価値とは一般的に反するが、そのいずれかに限定せず、両方の要素を両立させるカテゴリーである。研究費を受ける側にとっても、出す側にとっても受容し易い論理を提供し、科学政策上甚だ有効

な整理概念である。（中略）

我が国においては、応用研究に優れる一方、基礎研究は一般に貧弱であり、我が国の応用研究はむしろ国外の基礎研究を基盤とすることが少なくなかった。この点は英国とはちょうど事情が逆であるが、解離した基礎研究と応用研究の間を埋める必要があるのは同様である。この解離の社会的背景にはやはり我が国独自のものがある。我が国の大学においては、研究の自由の主張と産学協同の弊害に対する危惧が強かった一方、企業の方では、我が国の大学の基礎研究にあまり大きな利用価値を見い出さなかったといっている言い過ぎであろうか。率直に言って、今日でも多くの企業家は、大学等で行われる基礎研究に利用価値を認めるのでは

なくて、基礎研究に対する精神的な共感ないし慈善（チャリティ）の気持ちから、人材供給のパイプをつなぐ目的のため、あるいは基礎研究只乗りの非難をかわすために、これを支援する必要があると考えておられるように見受けられるといえは誤解であろうか。企業等から大学への奨学寄付金が平成4年度501億円に及んだのはまことに喜ばしいことであるが、受託研究費が53億円に止まっているのは、依然として企業にそのような潜在意識のあることを示唆するように思えてならない。「戦略研究」の概念は、大学等でこれまで基礎研究として一括されてきたカテゴリーの中で、近い将来に应用される可能性を持つものに特別な照明を当て、その企業との近縁性を意識させる効果がある。また、会社等で使われる基礎研究費は、年間6千50億円にのぼるが、これは実際には大部分が「戦略研究」に向けられていると推測され、ここに大学等の研究者との協力の大きな素地が十分にあることが示唆される。（中略）

「脳の科学と心の問題」特別委員会が4月18日の連合部会で中間報告された問題を例にとると、脳がいかにか働いて心を生み出すのかの謎を解くことは、基礎科学の最終問題といってよいほど根源的な人間の知的興味の的である。140億といわれる膨大な数の神経細胞の働きがいかにかして一つの意識というまとまった働きに統合されるのかは、それ自体極めて深遠な基礎科学の問題である。しかし、脳の研究はその物質的なメカニズムの解明により、脳神経系の病気を根絶し、脳の老化を防ぐといった医療上の大きな「戦略性」を孕んでいる。また、将来脳の情報処理の仕組みが解明されれば、ニューロコンピュータのような新たな原理を持つ情報機械を生み出す工学上の「戦略性」も極めて大きい。さらに、心のレベルについても、育児や教育の参考になり、産業心理学を助け、災害時の特異な心理状態への適切な対処を示唆するなど、人文・社会科学の広い分野での「戦略性」がある。米国の研究者がいち早く議会で働きかけ、1990年に始まる脳の10年Decade of the Brainが決議され、ブッシュ大統領が行政機関に対して脳の研究への支援を要請したのも、これらの戦略性に着目してのことに他ならない。

このように、「戦略性」に注目して強力な研究支援を行うことは、基礎科学としての脳研究にとっても、助けになりこそすれ妨げになるとは思われぬ。一般的にも「戦略研究」への支援からその基盤である純粋基礎研究への波及効果が期待できるが、ただ、必ずしもそれが望めない分野も少なくない点は注意を要する。研究者の中には、「戦略研究」を重視すると純粋基礎研究が圧迫され、置き去りにされる恐れがあるとして警戒する向きも少なくない。基礎科学の源は人間本来の知的興味にあり、応用とは無縁のところから始まることは確かな事実である。このような知的興味に基づく基礎研究を重視し、支援することが知的な文化的社会にとって有意義であることはもちろんである。あるいは、レーザーの発見のように純粋基礎研究の成果が長い時間の間に周辺技術の進歩により大きな戦略価値を持つようになった事例は数多くあり、基礎研究に潜在

する戦略性を予見することの困難さも指摘される。最近漸く基礎研究への理解を深めてきた我が国の社会に「戦略研究」の概念を持ち込んで、逆効果を招くことは私の本意ではない。私が強調したいのは、我が国においては本来基礎研究が弱体であったのに加えて、「戦略研究」もまた明確に意識されず、大学と企業の間が空白のままに置かれてきたことである。この空白を埋めるために、基本的なコンセプトにまで遡って大学と企業との関係を再構築することの必要性である。

〈我が国に「高度研究体制」を〉

歴史的な変化の時に当たり、学術の格段の推進が待望される今日、世界と我が国の学術体制にまつわる多くの問題を指摘した。我々は、多くの現実的な制約の下、先行きの不透明さに悩みながらも、次の世紀に向けての見通しを明らかにしようと努力しているが、ここにおいて、特に研究者の立場からの発想を基に「高度研究体制」とも呼ぶべき我が国の将来の学術体制を構想することが重要と考える。

この体制を実施するためには、まずともかく大きな研究資金が必要である。ゆっくりながら堅実に改善を図っていく我が国得意のグレードアップ方式では、この競争的な世界の中で生き残ることは難しい。すでにすっかり体制を整え直し、急速に進みだした世界の進度に遅れないようにするだけでも容易ではない。激しい先取権争いから脱落すれば、すぐ遠く置き去りにされてしまう。これまでのように、他国が多額の犠牲を払って開拓した路を安全に辿っていくことはもはやできない。誰にとっても始めてのフロンティアで、世界と互角に公正に競争していかなければならない。これまでのように、最小の投資で最大の効果を挙げることは望むべくもない。最大の効果は最大の投資をするものにしか保証されない。（中略）

このような「高度研究体制」は、前期において日本学術会議が提案した国際貢献のための新システムの構想を包含し、昨年9月我々が採択した第16期活動計画の精神を凝縮して現するものである。恐らくは我が国の研究者の多くが抱いている強い願望の表現であるが、ただの願望ではなく、このようなものがなければ、我々研究者の未来はありえないという厳しく強い要請を含んだものである。研究者本来の自由で創造的な学問的興味を追求しながら、国や社会の強力な要請に応え、深刻な地球規模問題の解決に尽力することを可能にするためには、なくてはならない体制である。

戦後50年間、嘗々として築いてきた我が国の学術の現状が、このような要請にどのようにに接近し、あるいはどのようににまだ遠いのか、今こそ冷静に分析すべき時である。日本学術会議の審議の中から、この「高度研究体制」のあるべき姿をより具体的に現せば、それは今日我が国の学術体制の現状を映し出し、それがいかに高度とはいいがたい状態にあり、むしろ至る所に危機的な状況が伏在していることを示すだろう。そして今後、我々が努力を結集すべき明確な目標を与えてくれるであろう。

（全文は、日本学術会議月報平成7年5月号参照）

公開講演会「産業空洞化問題を考える」開催さる

平成7年9月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、7月に開催された日本学術会議主催公開講演会「産業空洞化問題を考える」の概要について紹介します。

日本学術会議は、学術の成果を市民に直接還元するための活動として、日本学術会議会員が講師となって、市民を対象に年2回、日本学術会議主催の公開講演会を開催しています。

日本学術会議のグローバリゼーションと社会構造の変化特別委員会は、いわゆるグローバリゼーションの進展によって我が国の経済・社会が受ける諸種の影響と、それに伴う様々な問題点を吟味し、今後、我が国がとるべきそれらへの対応策の在り方を検討することをその任務とし、特に、現在の我が国にとっての最も重大な危機的事態とも言うべき「産業空洞化」の問題の分析に最重点を置いて、審議を進めつつあります。

今回の公開講演会では、この特別委員会によるそのような分析・審議の成果を踏まえて、3人の講演者によって、まず、(1)我が国の経済を全体として見てマクロ的に考察するという経済学的な視点からは、現在の長期不況と異常な「円高」に伴って余儀なくされつつある我が国産業の「空洞化」という事態をどう捉え、また、それに対応するべき経済政策はどうあるべきか、そして、次に、(2)技術工学的な観点からすれば、このような現在の状況はどのように把握され、また、それについて、どのような問題点が指摘されるべきか、そして、さらに、(3)企業経営の面から見た場合、このようなグローバリゼーションのインパクトはどのような意味を持ち、我が国の企業はどのようにそれに対応しつつあるのか、という3つの視角からの分析が行われました。

この講演会は、平成7年7月14日(金)の午後1時20分から、日本学術会議講堂において約200名の聴講者を集め開催されましたので、その概要をお知らせいたします。

◇次 第

- 司 会 吉田 民人(第1部会員)
- 1 開会の辞 利谷 信義(日本学術会議副会長)
- 2 挨拶 吉田 民人(第1部会員)
- 問題提起
- 3 講演

- (1) 日本経済再生の方途
丹羽 春喜(第3部会員)
- (2) 技術移転と空洞化
富浦 梓(第5部会員)
- (3) グローバリゼーションと日本企業の多国籍化
岡本 康雄(第3部副部長)
- 4 質疑応答
- 5 閉会の辞 西島 安則(日本学術会議副会長)

◇問題提起

吉田 民人(第1部会員、中央大学文学部教授)

空洞化という言葉は、英語でフォローイングアウトと言われ、これが最初に問題になったのは1960年代のアメリカであり、当時ECにアメリカの自動車あるいは電機産業が出て、アメリカの労働組合が、ジョブ、つまり仕事の輸出であるということでもかなり反対したといったようなところから始まって、日本でも、1960年代の後半には東南アジアに直接投資が開始されていた。もちろんこの種の問題は、経済のグローバリゼーションという、まさにグローバリゼーションと社会構造の変化特別委員会が担当しているテーマの一つであるが、その空洞化が特に最近、円高の状況の中で国際競争力の著しい低下を招くということで、ますます加速されるというふうにみられているわけで、この種のテーマをグローバリゼーションと日本の社会構造の変化の中でも最も緊急のテーマの一つとして取り上げることになった。

空洞化といっても産業の空洞化、金融の空洞化、技術の空洞化、あるいは産業の空洞化も生産の空洞化、経営の空洞化あるいは雇用の空洞化といったさまざまな側面があるわけで、主としてその辺の問題を「産業の空洞化」という一言である意味でラフに総括させていただいた企画である。

中身は三つあり、(1)日本経済をマクロ的な角度から見ての空洞化の原因とその対策について、(2)技術の空洞化に関して、(3)ミクロ的な企業がグローバリゼーションの中で国際化していく。まさにそういう意味で言えばミクロ的であると同時にグローバルな、その意味

でマクロ的な観点から、それぞれ講演が行われる。

ここで出る問題は多岐にわたるが、基本的には空洞化の原因の究明と、それに対する対応策という二つの側面からの講演となるが、例えば大蔵省の立場あるいは日銀の立場、あるいは地方公共団体の立場、あるいは企業の立場、それぞれの立場によって微妙に特殊利益が反映せざるを得ないような問題構造になっているが、研究者というのはそういう特定の、つまり職業的な集団の利益から比較的解放されて、非常に客観的な判断をすることができる職業集団に属しておることから、できるだけ客観的に、一般的に特殊な利害にとらわれない角度からの検討をさせていただくことになっているので、研究者としてはこういう見方をしているんだということをぜひお聞きいただきたい。

◇日本経済再生の方途

～円高と産業空洞化問題をどう考えるべきか～

丹羽 春喜

(第3部会員、グローバリゼーションと
社会構造の変化特別委員会委員長)

- ・ ケインズ 対 反ケインズ
 - ・ 経済学の50～100年の退歩
——ベトナム後遺症的ニヒリズム——
 - ・ 政策の不合理性と長期経済停滞
 - ・ 三重の悪循環的ジレンマによる不況の永続化
 - ・ 「信賞必罰」システムのフロート制と「円高」の責め苦、そして産業空洞化
 - ・ 「低成長→低税収→財政赤字→緊縮財政→不況永続化」の悪循環
 - ・ 「リストラ不況」の危険性
 - ・ 20年以上もの超長期不況
 - ・ 結果としての「近隣窮乏化」政策（対外経済摩擦の根本的原因）
 - ・ 「正常な」国際分業と「異常な」空洞化とを混同するな
 - ・ ミスリーディングな「成熟経済」パラダイム
 - ・ 龐大なデフレ・ギャップ
——それを直視しようとしないう『経済白書』の危険性——
 - ・ 「規制緩和」、「リストラ」、「行革」、「市場開放」、等々の限界と欺瞞性
 - ・ 「合成の誤謬」の問題をまじめに直視しようとしないう風潮
 - ・ 朝野をあげての幼児化現象
 - ・ 必要な「最善のシステム」ビジョン（市場経済＋国民経済予算）への回帰
——むしろ、デフレ・ギャップこそ「真の財源」——
 - ・ 震災復興と被災者支援の政策はどうあるべきか
——国家の本質的な機能とは何か——
 - ・ 混迷からの脱却へ
- おおよそ、上記のような諸項目について、問題点を解

きあかし、日本経済再生の方途について、国民経済予算制度を現在の市場経済をベースにしている経済体制に組み込むべし等の提言を行いました。

◇技術移転と空洞化

富浦 梓(第5部会員、新日本製鐵㈱常任顧問)

製造業は全て技術の発明と、その移転によって、拡大、発展を成し遂げてきた。鉄鋼業における技術移転の歴史を振り返ってみると、一般的に技術の個人依存性が高いものほど移転が困難であり、技術の表象可能性の高いものほど移転が容易である事に気がつく。

技術の完全な表象には多くの困難が存在し、それ故に未だ経験に依存するところが多い。技術の表象可能性を高めるには、製造に伴って生ずる現象を分析して、基本過程を取り出し、それ等を統合して新たなシステムを発現するという行為の繰返しが必要とされる。

このような経験の科学化を継続的に行われないとすると、技術の空洞化が生じやすくなる。

このような点について着目し、技術移転と空洞化について、生産技術としての工学から社会技術としての工学へのシフト等の具体的提案としてまとめました。

◇グローバリゼーションと日本企業の多国籍化

岡本 康雄(第3部副部長、青山学院大学国際政治経済学部教授)

日本の製造企業は、1960年代後半東南アジアに生産拠点を軸とした海外直接投資を始めた。そして70年代に入ると、貿易摩擦回避がらみで米国向けの海外直接投資が、電機・電子、さらに乗用車といった分野において大規模に行われるにいたった。EUにも同じ様な分野での生産拠点の形成が進められた。この間、日本企業の競争優位資源の海外移転が果たしてどのように行われうるか、が重要な課題であった。

他方、世界規模では、各国、特に先進国間の所得水準の平準化と市場の同質化技術水準の均等化と革新の同期化が進み、情報通信技術の急速な進歩とそれによる伝達コストの低下、各国制度の自由化がこれに加わって、80年代国境なき経済——グローバリゼーションが急速に進展し、グローバル規模での競争が重要な課題であった。

そして80年代後半からは、アジアN I E S、90年代にはアセアンが台頭し、東アジア全体がグローバルな注目を浴びるにいたっている。そして日本は、急速な円高によりアセアンへの生産移転を急テンポに進めざるをえなくなっている。それは、日本国内の空洞化を誘発している。

これら三つは、今現在、同時解決を求められている課題である。このトライアドについて考察しました。

※ なお、この講演会の模様については、前回の講演会と同様、日学双書No.24「産業空洞化問題を考える」として、(財)日本学術協力財団より刊行予定です。

GENES TO CELLS

Published in association with the Molecular Biology Society of Japan

GENES TO CELLS is a major new monthly journal providing an international forum for top quality research results in molecular and cellular biology. Manuscripts are now being accepted for publication in the January 1996 issue.

GENES TO CELLS welcomes original articles describing significant advances in molecular and cellular biology. The journal will focus on high quality papers addressing the basic mechanisms underlying biological processes in prokaryotes and eukaryotes. Major fields of biology to be covered are: gene structure and rearrangement; gene expression and regulation; cell growth and development; and signal transduction.

Editor-in-Chief

Jun-ichi Tomizawa
National Institute of Genetics, Mishima, Japan.

Editors

Helen M Blau
Department of Pharmacology, Stanford University Medical Center, Stanford CA, USA.

Gary Felsenfeld
Laboratory of Molecular Biology, National Institutes of Health, Bethesda MD, USA.

Martin Gellert
Laboratory of Molecular Biology, National Institutes of Health, Bethesda MD, USA.

Thomas Graf
European Molecular Biology Laboratory, Heidelberg, Germany.

Ira Herskowitz
Department of Biochemistry and Biophysics, University of California, San Francisco CA, USA.

Brigid L M Hogan
Vanderbilt University School of Medicine, Nashville TN, USA.

Tim Hunt
Imperial Cancer Research Fund, Clare Hall Laboratories, South Mimms, UK.

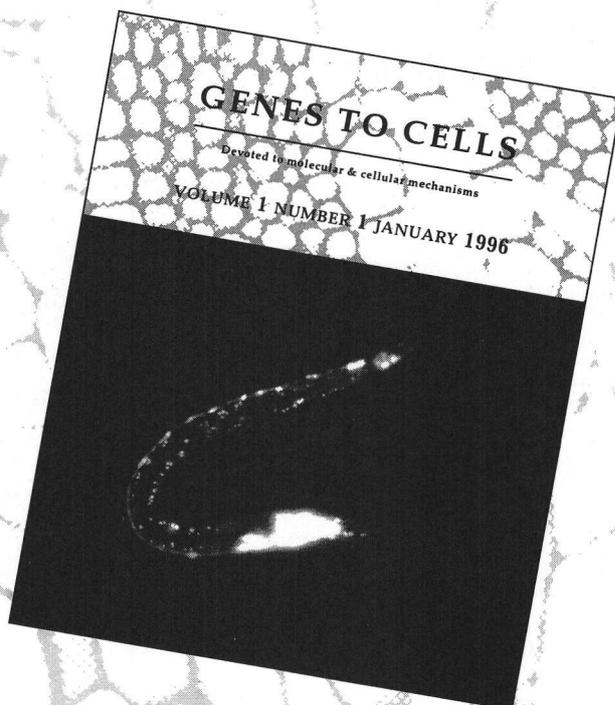
Tony Hunter
Molecular Biology and Virology Laboratory, The Salk Institute, San Diego CA, USA.

Shigetada Nakanishi
Institute for Immunology, Kyoto University, Japan.

Jack W Szostak
Department of Molecular Biology, Massachusetts General Hospital, Boston MA, USA.

Tadatsugu Taniguchi
Department of Immunology, University of Tokyo, Japan.

Mitsuhiro Yanagida
Department of Biophysics, Kyoto University, Japan.



GENES TO CELLS (ISSN 1356-9597)
will be published monthly from January 1996.

**TO ORDER YOUR SUBSCRIPTION AT THE SPECIALLY REDUCED MBSJ RATE
PLEASE USE THE SPECIAL ORDER FORM**

b

Blackwell
Science

GENES TO CELLS

Genes to Cells will be published monthly from January 1996, ISSN 1356-9597.

Order Form - 1996 Subscription

- Please enter my Volume 101 (1996) subscription to *Genes to Cells* at the special price of ¥7500. I am a member of the Molecular Biology Society of Japan

Unfortunately we are unable to process subscription payments in Yen. We will therefore charge you an amount in sterling which will be equal to or less than ¥7500 at the exchange rate in force on the day that we process your order.

- Please debit my American Express / Diners / Eurocard / Mastercard / VISA card no:
with the amount in Sterling corresponding to ¥7500
expiry date /
Signature.....Date.....

- Please send me an invoice (all subscriptions are payable in advance)

Name.....
Address.....
Street / PO Box.....
Town.....
County.....
Country.....Telephone no.
Post/Zip Code.....e-mail.....

Please return to:

Anna Rivers, Blackwell Science Ltd, Osney Mead, Oxford OX2 0EL, UK.

Tel: +44 1865 206206; Fax: +44 1865 206096

e-mail: anna.rivers@blacksci.co.uk

日本分子生物学会 会報

年 3 回刊行

第52号 (1995年10月)

発 行：日本分子生物学会 庶務幹事

製 作：学会センター関西

(財)日本学会事務センター 大阪事務所